氏　　名	BHATTA　BAIKUNTHA
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博甲第 235 号
学位授与の日付	2019 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学位論文の題目	Extended-Telling Sequences, Question Design, and Feedback in English as a Foreign Language Classrooms ―A Study of Talk-In-Interaction in Japanese and Nepalese Educational Contexts―
論 文 審 査 委 員	主査　神奈川大学　教授　デビッド・アリン 副査　神奈川大学　教授　岩　畑　貴　弘 副査　神奈川大学　教授　菊　地　恵　太 副査　神奈川大学　教授　久保野　雅　史 副査　神奈川大学　教授　細　田　由　利

【論文内容の要旨】

本学位論文では、日本とネパールの英語の授業における教師と生徒の相互行為、特に教師による (1) 語りの連鎖、(2) 質問のデザイン、(3) フィードバックの３つの現象を会話分析の手法を用いて分析した。

本研究で扱ったデータは日本とネパールの英語教室の相互行為を約 22 時間録音録画したものである。録音録画されたデータから詳細なトランスクリプトを作成し、元の録音録画データとトランスクリプトを繰り返し観察して分析を進めた。分析するにあたり、会話分析の手法に基づき、事前に研究上の問い（research question）は設定せずにデータを観察することにより前述の３つの現象を見出し、その現象を綿密に分析した。

第 1 章では、本論文の全容を紹介し、本研究の研究上の意義について論じた。

第 2 章では日本とネパールの英語教育の歴史的背景を紹介した。

第 3 章では今回使用した会話分析の手法について、特に順番交替、連鎖の組織、修復の組織、受け手に合わせたデザイン、質問と応答の連鎖について論じ、その後本論文の焦点である教室相互行為に関する現在までの研究を紹介した。

第 4 章では、本研究で使用したデータについて詳しく紹介した。

第 5 章では教室内における、通常のティーチャートークの連鎖と、教師が自らの経験をもとに語る物語の連鎖の２種類を分析した。分析の結果、教師が特定の教育目標を達成するために語りの連鎖を展開していることが明らかになった。また、語りの連鎖を通じて、学生の理解の程度も明確に示された。

第 6 章では教室で観察された質問のデザインを検討した。質問のデザインを分析した結果、連鎖的な位置と行為に関する質問と、参加者の知識に基づく質問の両方が見られた。連鎖的な位置と行為に関する質問では、更に 4 つのカテゴリーに分類された質問が観察された。それらで行われた行為は、(a) 教材に書かれた質問で始まる連鎖、(b) 教師が偶発的に行う質問で始まる連鎖、(c) 以前に用いた質問に基づいて始まる新しい連鎖、および (d) 応答を追求するために以前の質問の形を変更して始まる連鎖であった。

更に、参加者の知識に基づく質問では、教師があらかじめ答えがわかっている質問と答えがわかっていない質問の両方を行なっていることがわかった。あらかじめ答えがわかっている質問の例では、教室内の相互行為では、教師が学生から応答を引き出し、その応答を評価することで学生の理解度を確認しているという共通の特徴が示された。一方、答えがわかっていない質問の例では、学生の経験や個人的な意見など、教師が知らない情報を引き出す行為を行っていた。しかしながら、分析では答えがわかっていない質問に対しても教師は評価を与えていることが分かった。このことから、いかなる学習者の応答であっても、教師による評価の対象になっているという教育場面の特徴が立証された。

第 7 章では教室内の相互行為における教師によるフィードバックを分析した。データを考察した結果、教師は (a) 明白な肯定的評価、すなわち、"great," "good job" などを用いて与える評価、(b) 生徒の応答への感謝の意を述べ、その応答を繰り返すことによる承認、(c) 生徒の応答を繰り返すのみの承認、(d) 新たな行為を開始することによる直前の行為の承認、(e) 否定的な評価の 5 つの種類の評価を行っていることが明らかになった。

第 8 章では、本研究から得られた結果をまとめている。

【論文審査の結果の要旨】

本研究の結果は、教育学上にいくつかの重要な意味があると考えられる。第一に、本研究では実際の語学教室で録音録画されたデータを分析しており、現実を確実に描写していると言える。第二にこの研究はネパールと日本の英語教室における相互行為の相違点を会話分析の見地から示した最初の研究と言える。第三に本研究の結果は第二言語の教室におけるある特定の教育実践（例えば、質問の行い方やフィードバックの与え方）の意識を高めるうえで役に立ち、教員育成に応用できるであろう。第四に、本研究では、教師は生徒の応答を引き出す際に生徒の反応に注意し、その時々の瞬時の判断が必要であることが示唆されていると言えるであろう。

本研究の課題としては次の点が挙げられる。第一に紹介された先行文献の一部（特に日本とネパールの英語教育の歴史）と本研究のつながりがはっきりしない部分があったので、今後の研究では紹介する先行文献と当該研究との関係をはっきり明記する必要があると思われる。第二に、データ収集の際に、１クラスに教師の方を向けた一つビデオカメラしか設置しておらず、教師は身体的動きに至るまではっきりと観察できるが、生徒の方はあまりよく観察できない。今後の研究では複数のビデオカメラを用いてデータ収集することにより、生徒の側の分析がより正確に行えると思う。

本論文の総合評価は上記の通りで、主査、副査ともに博士学位論文として十分な水準に達していると認めた。